

世相史を語る台湾故事館

くぼまさとし
久保正敏 民博 文化資源研究センター



台湾故事館入口

展示の方法のひとつに情景再現、生活再現とよばれる手法がある。一九世紀初頭、パノラマ絵師で後に写真発明家となる、かのタゲールが考案したジオラマもその一種だが、なかでも実物大の三次元空間を設定し人がそこに入り込めるタイプの再現展示は再現効果大きい。屋内型と野外型にわけられるが、前者は室内型テーマパークともよばれ、また後者は、野外博物館もその範疇と見れば歴史は古い。

日本における屋内型再現展示

日本における大規模な屋内型では、一九八六年開館「深川江戸資料館」や一九八九年開館「広島県立歴史博物館・草戸千軒」が開館時に話題を集めた。民博に近いところでは、二〇〇一年開館「大阪くらしの今昔館」や「大阪歴史博物館」にも、屋内随所に再現展示がある。また民博で二〇〇二年三月〜七月に開催された特別展「2002年ソウルスタイル——李さん一家の素顔のくらし」も屋内型再現展示が中心だった。わたしが最近訪れた台北にも、同じコンセプトの室内型テーマパーク「台湾故事館」がある。

ビルの地階にひろがる異空間

二〇〇五年に開館し、「一九六〇年代の台湾の純朴さ、歴史、人びと、生活を二五〇〇坪の空間に隅々まで細やかに再現、アジア最大級の屋内アミューズメント」が売り文句。ショッピング・ビルの地下一階、入口は百均ショップ（換金レート通り三九元均一の表記が妙）看板の下、階段を降りると、そこは昭和三〇年代の日本に驚くほど似た街並みが再現された異空間。懐かしいマツダの三輪トラックや小型乗用車の現物、蚊や蠅撲滅キャンペーン看板、木製ゴミ箱、タイガーバウムのほうろう看板や、美空ひばり主演「リング園の少女」、デイズニアアニメ「白雪姫」、「君の名は」にそっくりな「相逢台北橋」の映画広告がある。映画館や写真館、そ



映画看板



街並み再現

没入感の是非

して当時の台湾海峡危機を反映してか防空壕もしつらえてある。

現地人の入館者が少ないようだったが、過去に関心のある世代が少ないからだろうか。わたしには、日米中の影響をうかがわせる当時の雰囲気しのばれて興味深かった。雑居ビルの低い天井に圧迫感を覚えたが、空間に入り込むにつれ気にならなくなった。かように再現展示は、モノに触れつつ空間に没入し疑似体験できる力をもつ。それゆえか過去の再現展示は、高齢者の脳トレのひとつ「再現法」に有効と最近注目されているが、その一方、観る側の選択権、想像力を奪ってしまう危険もあるのか。むかしから展示技法に関する論点のひとつではある。